



発行所
〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127
毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語〔九〕

後堂 門 原 信 典

「普照の序」⑧「坐禅が足らん」
「至道は美に言無く、宗師は慈を垂れ弊を救う。」

至極の大道は、言葉ではない。禅の宗旨を体得した師は慈悲心で以って迷いから導いてくださる。

至は至極、至り極まる、最上の大道。佛道、坐禅の事です。

沢木興道老師が「行き着くところに行き着いて、初めておちつきもあり、真のよろこび、真のたのしみもある。」とお示しです。坐禅は真の安楽の法門です。

自分の生き方、有り方を妥協することなく突き詰めていけば坐禅に行き着くのです。

坐禅は実践ですから「言無く」です。言詮不及。言葉で表現してしまえば、かえってそれに囚われてしまつて、方向を間違えてしまいます。

しかし、宗師である圓悟禪師は慈悲心を以って、言葉で説きつく

すことのできない真実を、あえて言葉で修行者の迷いを救つてくださっているのです。

弊とは坐禅の弊害。坐禅を勘違いして、ただの精神的な事、心理的なもの、呼吸法、瞑想の手段にして、その結果健康になった、精神統一が出来た、ストレスから解放され爽やかな気持ちになった。としたら、もうそこで、ハイおしまいです。

私達は生まれてから今日まで、自分の為にしか生きてないので、自分の為には何にもならない坐禅がわかりません。衆生済度の坐禅、仏法の為の坐禅が理解できません。

自分の為では無いから、無私無我です。終わりが無いのです。終わりの無い道に行き着く。それが信仰であり、至道です。難しいです。

そして弊には、粗末、未熟という意味もあります。

私が初めて瑞應寺の山門をくぐったのが、昭和十五年の十一月三十一日でした。お釈迦様の成道を慕い十二月一日から一週間、朝三時から夜九時まで只管の坐禅、報恩の臘八摂心に参禅させていただきました。

八日の朝、成道会として小参があります。小参は修行上の疑問を老師に問い、指針をいただく大切な行持です。

私は当時堂監の檀崎通元老師に問いました。「身体が不自由で坐禅出来ない人はどうすれば良いでしょうか」とすると「莫妄想(妄念をおこすな)と即答。

それは「いらん事を考える前に、坐禅が出来るお前はもつと座れ」と言われたのが、「坐禅はそんな簡単なことではないぞ」なのか。どういったけばよいのでしょうか。

摂心に行く数日前に、双子の男の子の下半身が結合して生まれ(二重胎児と云います)、それを分離する手術と、幼稚園に通うまでのドキュメンタリー番組を見ました。四十年も前の事ですが、今でも手術の映像をよく覚えて

います。坐禅中そのことが頭から離れず問わせていただきました。その年私は永平寺を乞暇して布教師養成所に通つておりました。

その時の主任講師が通元老師でした。そこでは様々な講義と共に、

毎回研修生全員の前で十五分間の法話実演があり、皆さんからの感想、そして通元老師からの講評をいただきました。年三回の研修の最終回が翌年にあり、私はその「莫妄想」を中心にお話をさせていただきました。

実演を終わり、通元老師から「答えたのは実は私で、本当は一発警策をやらにやいかんかったが、そんな事を考えていたとは知らず御無礼しました。しかし答えは一緒じゃ。いつでもどこでも誰でもそこから出発するしかないんじや」として、私は自信の無い、頼りない顔つきだったのでしょうか。「あなたは顔が優しすぎる、自分でも話の中で言つたおつた通り、確かに坐禅が足らん」最後にそう言われました。

私の幼稚な思いを満足させるようなものは坐禅ではなかったのです。大慈悲心を以って弊から救い、向上の一步を歩ませていただく一言でした。しかし、いつまで経っても坐禅が足ることは無いのです。

終わりが無いのですから。儼し是の如く見れば、方に徹底老要なることを知らん。」

雪竇禪師も圓悟禪師も実践するしか無い坐禅を、言葉で以って示されるから、かえってその徹底した老婆心切がよくよくわかる。

「其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ仏種族を滅することを免れず。」

若しこの碧巖録を読んで、言句にまどわれ、沈み込んで、それこそ佛法を潰してしまう。だからこそ、あらゆる方向からこれでもかと説きつくす。

「普照、幸に師席に親しみ、未聞を聞くことを得たり。」
圓悟禪師の弟子である私普照は、佛縁に恵まれ師匠のお示しに接し、今まで聞いた事の無い教えを聞き、真実の言葉を体得できた。「道友集まりて簡編を成し、鄙拙其の本末を叙す。」

そこで佛道修行の友と共に、その講義をまとめ碧巖録とした。甚だ未熟で僭越ではあるが其の経緯を述べる。「鄙拙」はおろかで拙いと云う謙遜の意。

「時に建炎戊申暮春晦日、参学嗣祖の比丘普照謹んで序す。」
南宋の高宗皇帝の建炎二年(一一二八年)四月三十日、圓悟禪師に学び、佛法を相続した弟子普照がここに謹んで記す。

こうして碧巖録は編集されましたが、同じ圓悟禪師の弟子である大慧禪師は、この碧巖録の版木や刊行されたものを可能な限り集めて焼き捨てます。

それを後の一三〇〇年頃に帳焯明遠が、辛うじてあちらこちらに残った写本を校訂して再版したのが帳本と言われるもので、それが現在に伝わっている碧巖録です。

次回からその序文を読ませていただきます。(続く)

テレホン法話 〇八九七四一〇〇三三

禅のたより



◆因縁の生ずるところ

近年、全国的に空き家の増加が問題になっております。空き家のまま長らく放置されれば、様々な面で悪影響を及ぼします。住む人を失った家が、すぐに傷むことは皆様ご承知のことでしょう。

先日、私のおりますお寺に出入りして下さっている棟梁から、こんな話を伺いました。「空き家が傷むのは風が通らないこともあるが、人が住まなくなつたこと自体が原因なのだ」とのこと。詳しくお聞きしますと、「日本建築は、床板や柱、鴨居、天井、垂木など、いろんな部材が緻密に組み合わさって出来ている。人が住むことによつて、人の重さや振動が、家の構造全てに刺激を与えるのだ」と。

日本建築の家に、柱が無ければ、床が無ければ、鴨居や天井が無ければ、建物の体で成さず、人は住めません。しかし、どんなに完璧に建てられた家も、人が住まなくなると刺激がなくなつて、すぐに腐りや歪みが出て傷んでしまうというのです。

建物を中心に考えれば、人も、欠かすことの出来ない大切な部材のひとつだということですね。

さまざまなものがあるが、さまざまにつながっている。そして、その中のどれ一つが欠けても、バランスが崩れてしまう。このような繋がりを『縁』と言いますが、私たちの生命も同じですね。私たちの生命そのものが、父母の出会いという縁に始まり、その父母も祖母の出会いという縁から始

まっています。そんな縁の繋がりです。そんな縁の繋がりによって私たちが生まれ、さらに細かな網の目のような縁に支えられて、今日まで生きてきた。いや、生かされてきたお互いなのです。

仏教の言葉に「因縁所生」という言葉があります。因縁（縁起）が生まれるところ、という意味になります。私たちは過去、そして現在のさまざまに支えられて生きています。頂いているご縁、支えられているご縁に気づいたとき、自ずと感謝の気持ちが生じます。

では、その感謝は誰に、どのように、伝えていけば良いのでしょうか？それは、昨日からのご縁に感謝し、今日からのご縁を大切にしていこうということに他ならないと思うのです。私自身、あなた自身からこの未来の新しいご縁の出発点となるのです。

お盆の好時節、お迎えしたご先祖さまの御前でこころ静かに手を合わせ、感謝の念を忘れず、自分自身を良

き縁の生ずるところとしたいものです。

高知県予岳寺 濱田道圓師
令和四年八月十一日〜二十日

◆任に当たっては

私がおりますお寺では、現在、お堂を建立中です。この工事の中心となる棟梁はとも木に詳しく、一方ならぬこだわりを持った方です。

ひとつ口に木といつても、育つた場所によつて、全く違つた特徴があると伺いました。同じヒノキであっても、高知産と有名な木曾産では含まれる油分量が違つていて、木曾産は油分量が少ないため、湿気の多い高知では水分が入りやすく、建材にはあまり適さないと言っています。

棟梁は、仕入れる木材のほとんどを製材された木材ではなく、丸太で購入しています。一本一本の木はそれぞれ、育つた山の方角や、場所の当たり具合などで、どれをとつても同じものはありま

せん。

長年の経験で木の特徴や癖を見極め、丸太からの挽き方を始め、節の把握と、木目の流れ、乾燥での狂いの予想など細心の注意を払い工夫を凝らします。そして、それぞれの特性にあつた部材に仕上げ、工事を進めていきます。

それは勿論、建て主のために少しでも経費を減らすためであるのですが、同時に、丸太を製材した時に、自分が思った通りの木材だつたと喜んで、予想と違つていて頭を悩ませたり、それらがおもしろくて堪らないとのことでした。

棟梁の話を聞きながら私は、ああ、木も、人も同じなんだなあと思えました。生まれた時代や場所や環境など、全てが同じという人は居らず、同じ人生もありません。様々な影響を受けながら皆、その人その人の個性をもって生きていくのです。心根がしなやかな人、柔和な人、真っ直ぐな人、頑固な人、さまざまの人がいます。得手不得手が

あつてもそれは当たり前のこと
とで、他と比べるものではないの
のです。

曹洞宗大本山永平寺を開か
れた道元禅師様は「任に当
たつて他に譲り難し」という
お言葉を残されております。
自分が任された事、自分の実
力で出来る事、自分の立場の
上ですべき事を、他の人に譲
ることなく全うしなさいとい
う教えです。

近年問題になっているプ
ラック企業や超過労働など、
公序良俗に反することは論外
なのは申すまでもありません
が、「任に当たつて他に譲り
難し」と言われたとき、さて、
自分の任とは何でしょうか？
自分の出来る事、すべき事と
は何でしょうか？

私に出来ないことを出来る
人がいます。その反対に、私
に出来ることを出来ない人も
います。出来る人と出来ない
人、お互いがお互いに、自分
の出来ることをして支え合
う。それこそが自分の任、自
分のすべきことなのではない
でしょうか？お互いを敬い、

認め合い、支え合おうという
気持ちをお忘れぬようにした
いものです。

高知県予岳寺 濱田道圓師
令和四年八月二十一日〜二十二日

◆ 有り難く いただきなさい

観自在菩薩で始まる般若心
経は、羯諦羯諦波羅羯諦波羅
僧羯諦菩提娑婆訶で締めくく
られます。

今、私達が読んでおります
般若心経は、三蔵法師玄奘に
よつて中国の言葉に訳された
ものです。

ただ、羯諦羯諦のところは、
インドの言葉が、そのまま残
されています。

その国の言葉でしか、表わ
すことが出来ないのです、その
まま残されたと言われてい
ます。

しかし、そのことを知りな
がら、日本ではいくつもの言
い方で訳されています。

その一つに、
「往き往きて、彼岸に往きて、

彼岸と結びつく。自分を度し、
他人も度し、一切を度し尽し
て彼岸に到り、涅槃を円満す
る。」とあります。

彼岸、というのは、彼の岸
と書きます。此の場所ではな
い、どこか他の場所というこ
とになります。

今から四十年ほど前に、修
行僧として、ここ瑞應寺に上
山しました。

上山して、間もない夕食の
時です。

いつものように私の目の前
には、御飯とお汁とたくわん
と、そしてお皿には、…私は、
自分の目を疑いました。輪切
りにされ、ゆでられた大根が、
一つだけ乗つていたのです。

思わず、隣に座つている先
輩にささやきました。「今日
は、大根だけですか。」

すると先輩は、平然として、
「有り難くいただきなさい。」
と言われました。

自分の気に入ったこと、自
分にとつて都合のいいことに
は、有り難く思えるけれど、
そうでないことに、有り難い
と思つたことがあつただらう

か。ありませんでした。

自分にとつて都合の悪いこ
と。自分にとつて気に入らな
いことに対して、有り難く思
う。そんな生き方が出来るの
だろうか。

般若心経には、「色即是空、
空即是色」と書かれています。
比べるものはどこにも無いの
だから比べることを止めてご
らんと。

自分の都合で比べている。
そのことを止めたら楽にな

る。いろいろなことが有り難
くなる。彼岸となる。

簡単に書いてありますが、
自分の都合、自分が、という
思いを捨てることほど難しい
ことはありません。私に出来
ることは、あつ今、自分の
都合で考えているな。」とい
うことに気づくことからだと
思っています。

瑞應寺専門僧堂講師 越海暢芳師
令和四年九月一日〜十日



法戦式



法戦式

八月三十一日(水)、今夏制中、峯岡徳彦士の法戦式が修行された。「永平頌古・身心脱落」に就き、一山大衆と問答商量。



法戦式

当山三十世大練忌法要

九月十日(土)当山三十世大慈通元大和尚の大練忌法要が行われた。



大練忌

夏安居解制

九月十四日(水)、六月に入制以来、三ヶ月。首座を中心に、辦道精進を続けた夏安居は、楞嚴会満散・土地堂念誦、十五日(木)の小参・人事行札等の諸行事を勤め、無事解制となった。



土地堂念誦

開山忌

九月二十一日(水)、当寺開山白翁長伝大和尚より五世再中興月庭要伝大和尚の報恩供養を、門原後堂のもと連夜特為献湯、翌二十一日(木)略朝課罷、門原後堂導師により献粥諷経、午時、村上山主が導師を勤め、正當献供諷経が厳修された。両日ともに、檀信徒先亡回向を修行。
今年も、コロナウイルス感染症拡大防止として、山内行持として厳修。

九月の日鑑

- 一日 祝祷
- 四日 日曜参禅会
- 六日 参玄会(八日迄)
- 十日 当山三十世
大練忌法要
- 十四日 楞嚴会満散
土地堂念誦
- 十五日 祝祷・小参
人事行札・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 開山忌連夜
- 廿二日 開山忌正当
- 廿三日 寶篋印塔供養
- 廿八日 両祖忌連夜
- 廿九日 両祖忌正当
- 卅日 略布薩

十月の予定

- 一日 祝祷
- 二日 日曜参禅会
- 七日 住友供養
- 十五日 祝祷・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 略布薩

永平寺贈西堂 大慈通元大和尚本葬之儀

令和四年十月三十一日(月)

大夜之儀 十七時より

令和四年十一月一日(火)

本葬之儀 十時より

银杏感謝録

- 山形県 小原寺 殿
- 鳥取県 玉泉寺 殿
- 群馬県 雲昌寺 殿
- 愛媛県 朝日屋旅館 殿
- 東京都 長光寺 殿
- 愛媛県 澄心齋 殿
- 長崎県 妙本寺 殿
- 愛媛県 大通寺 殿
- 高知県 善賢寺 殿
- 大分県 長松寺 殿
- 大分県 朝日寺 殿
- 宮城県 戸田恭子 殿
- 愛媛県 野間寺 殿
- 福井県 妙徳寺 殿

(令和四年八月十六日受付迄)



鐘声

瑞應寺専門僧堂にお世話になり、約六ヶ月が経過しました。様々な方と出会い、学び、助けられながら、安居生活を続ける中で研鑽を重ねてまいりました。不安や困惑だけでなく喜びや達成感など多くの感情、経験を日々の生活の中で感じております。周りの方々の支えの中で生きていることを実感する毎日です。

夏制中を無事に終えることができましたが、感謝の気持ちを忘れることなく、これからも精進してまいります。 鐘司 清之